



2025. 10. 8 発行 ニュースレター第338号

〒262-0019 千葉県花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表: 小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com , Home Page: <http://www.ceic.info/>

写真等無断転載禁止

市民団体と環境アセスメント

～環境アセスメント学会第24回大会 in 名古屋大学～

千葉県若葉区 鈴木 郁也

はじめに

ちば環境情報センターの研修制度の補助をいただき、2025年9月5日に名古屋大学で開催された環境アセスメント学会第24回大会に参加しました。産官民学さまざまなバックグラウンドを持つ方々120余名が出席し、盛んに交流が行われていました。東邦大学の先生や院生の方々も運営・発表で参加されていて、千葉から離れた地で思わぬ再会もありました。

私は大学で環境アセスメント制度は軽く教わった程度でしたので、不勉強なりに少しでも知識を持って帰れるように発表を聴いてきました。専門的な話を綴るには至りませんが、学会の様子をご報告させていただきます。

住民アセスの歴史と可能性

午前中は、一般研究発表と特別集会があり、いくつかの講義室に分かれて発表を聴きました。環境影響評価法に関係する政策や市民・住民が参加する合意形成など、過去に発表者が担当した事例から話題が提供されていたことが本学会の特徴であるように感じました。

特に興味深かったのは、NPO 地域づくり工房代表理事、傘木宏夫さんの「住民アセスの歴史と可能性」の発表でした。NPO 地域づくり工房はアルプス山麓「長野県大町市」を中心に活動する NPO 法人で、北アルプスの自然を生かし、市民主体の活動を通じて、環境・福祉・学び合いをテーマに持続可能な地域づくりを推進されています。発表では、事業計画を進行する事業者だけでなく、市民・住民が自主的に調査・予測・評価を行い、合意形成の場を作る「自主アセス・住民アセス」によって、持続可能な社会の構築への可能性を論じられていました。NPO 地域づくり工房は、市民・行政・事業者から依頼を受けて合意形成の場を取り持ち、さまざまな立場からファシリテーションを請け負うこともあるそうです。発表の最後には、制度や調査技術の改良だけではなく、「環境アセスメントの概念」の普及・推進を以て、持続可能な地域経済と環境保護の両立、ひいては地域住民とのよりよい合意形成を叶えることを強調されていました。

NPO 団体で活動している私にとっても、共感や興味をそそられるような話が多く、現在ちば環境情報センターが直面している下大和田谷津田の開発問題、市川市の人工干潟計画問題に対しても、有用と思われるような知見を得ることが出来ました。賛成・反対の極端な声をあげるのではなく、市民側からも建設的な提案をしていくことが、持続可能な地域社会の実現につながるのではないかと考えました。

ポスターセッション

午前中のプログラムが終了し、名古屋大学の学生食堂で昼食を摂り、会場はポスターセッションコアタイムへと移りました。企業・市民団体・大学関係者による一般部門と、学生による若手部門があり、若手部門には日本大学・東京科学大学・東京大学、そして東邦大学の院生の方々が発表されていました。

ポスターセッションは発表者と見学者の距離が近く、疑問や質問にも柔軟に対応してくださり、より親密な交流の場としてにぎわっていました。

公開シンポジウム「愛知万博 20 年：過去・現在・未来」

ポスターセッションコアタイム終了後、大講義室に移動して公開シンポジウム「愛知万博 20 年：過去・現在・未来」の講演、話題提供、そしてパネルディスカッションが行われました。

愛知万博は日本の環境影響評価制度の黎明・転換となった重要な事例であるため、2005 年に開催されてから 20 年の節目の年に、改めて愛知万博を振り返るという趣旨で議論が交わされました。愛知万博の文脈で藤前干潟の話や、三番瀬円卓会議に繋がる環境アセスメント・市民運動の歴史にも触れられ、これまで大学で漠然と学んでいた内容が、より実感をもって理解できたような気がしました。

網羅的な理解にはまだまだ程遠いですが、環境系の学生として、環境保全団体で活動する者として、今後も環境アセスメントの勉強を続けていきたいです。また、いつか自分の活動を事例・研究として発表できるよう、今回発表された皆さま方の手腕を参考に、自らの技術も磨いていきたいと思いました。

千葉市幸町公民館 夏休みこども環境教育講座 草木染め

2025年8月6日、千葉市幸町公民館で夏休みこども環境教育講座で「草木染め」の指導をしました。参加者は小学校1年から5年までの13人。1,2年生は保護者同伴です。ちば環境情報センターからスタッフとして3名が指導しました。

染料は、嫌われもののセイタカアワダチソウとごみに捨てられる玉ネギの皮。セイタカアワダチソウは、前日に佐倉市の荒れ地で採取しました。布はさらし、輪ゴムを使って絞り、媒染剤はお漬物用のみょうばんを使いました。

思い思いに絞った布を煮だした鍋に入れると、煮汁とは違った色に染まるから不思議。一人ひとり個性豊かなすてきな作品ができあがりました。

公民館の担当者さんからは、こども達は満足のいく作品を作ることができ、にっこにこの笑顔で帰っ

ちば環境情報センター 長 正子、小西 由希子
ていきました。また、保護者からは「安全な内容かつ自宅でも実施しやすい内容で子どもも楽しい、親も学びになり、ありがたい夏休みの経験でした」との感想をいただきました、と連絡があり、私たちスタッフも楽しい一日でした。



地域資産としての東京湾三番瀬猫実川河口沖の干潟再生 ー保全生物学と地域づくりの視点からー その2

東邦大学名誉教授 風呂田 利夫

4. 人工干潟造成に関する議論

三番瀬奥部はもともと干潟域であり、いまでも江戸川放水路による土砂供給があれば自然に干潟が形成されよう。しかし、それには長期的な時間を必要とするとともに、現在の河口部は港湾や航路として整備されており、定期的な浚渫が必要なことで自然的な土砂堆積による復元が妨害されている。したがって港湾のない猫実川河口沖での人為的な再生は、江戸川放水路沖での干潟の自然再生が妨げられていることの代償措置でもある。この人為的再生に対する否定的な意見もある。その根拠は、東京湾の海域面積の減少防止、再生予定地のアナジャコ、ウミゴマツボ（エドガワミズゴマツボ）などの底生動物ならびにスズガモなどの野鳥の保護、造成時の攪乱や人工的な環境での新たな環境問題の発生に対する懸念である。そのため湿地や干潟環境の再生はあくまでも現在の埋立地を干潟に戻すセットバックに限定することを提唱している。

今回の猫実川河口沖の干潟再生に関する問題は、都市圏の自然環境という社会的共有空間における自然環境の人為的再生と利用に関する意見の相違に根元がある。したがって保全と利用に関する社会的意思決定には、保全生物学、生態学などの自然科学的分野と同時に、再生手法、そして利用と環境管理つまり環境資産の社会への還元に関する社会科学的検討に基づく議論が求められる。

5. 三番瀬周辺の干潟環境と人為的関与

東京湾奥部には人為的影響を強く受けながらも干潟や河口湿地としての環境を維持している場所がみ

られる。ここではそれらの歴史と生物群集の特徴を紹介したい。

(1) 江戸川放水路干潟

この放水路は、増水時の江戸川水を排出するために大正時代に行徳地区の掘削で造成された。三番瀬の最奥部に開口しているが、上流に河口堰があり、平水時は閉門されているため淡水の流下はほとんどない。兩岸はほぼ全域にわたって幅50~100mの砂泥からなる干潟がある。開口部は市川港ならびにその航路として浚渫され、航路は三番瀬を縦断して東京湾に続いている。干潟には、トビハゼ、オキシジミ、ソトオリ、ハナグモリなど絶滅が危惧される東京湾干潟生物の希少種の生息が見られる。近年では、ウミニナ、ヘナタリ、フトヘナタリなど1980年代までは普通に見られた干潟性巻貝が消失した。また、クロベンケイ、ヤマトオサガニ、チゴガニ、コメツキガニ、アナジャコなど東京湾の河口湿地や干潟に分布する一般的な生物も豊富に生息している。

(2) 新浜（しんはま）湖干潟

新浜湖は1970年代初頭に行徳自然保護区内に造られた人工潟湖である。この潟湖の一部には干潟がある。また造成後に、市民活動により新浜湖に連続する淡水環境が復活され、淡水-汽水-海水が連続する環境の復元がなされた。この干潟の生物や環境については、造成直後から市民や地元の研究者による自主的な調査研究がなされている。この干潟では東京湾奥の干潟底生動物ならびに魚類のすみやかな進入がみられた。また近年では、潟湖奥部の泥干潟に江戸川放水路では既に絶滅したカワアイの個体群が新たに形成され、本種の東京湾からの絶滅を阻止し

ている。さらに、東京湾を北限とするトビハゼの湾内最大の繁殖地としても不可欠な環境となっている。

(3) 谷津干潟

かつては前浜干潟の一部であったが、1960年代の周囲の埋め立てにより、内陸に残された干潟である。埋立工事中に大量の泥が放出され、もともとの干潟基盤の上に50cmを超える軟泥が堆積した。2本の水路により海水交換が保たれ、干潟環境が維持されている。埋立工事終了直後からゴカイ類を中心とする多くの干潟生物が生息し、1980年代ではウミナナやイボウミナなど現在の東京湾内の希少種や絶滅種の生息も見られた。

この干潟は多くの野鳥が飛来することからラムサール条約登録湿地となり、現在では基本的に立入禁止による保護がなされている。しかし野鳥の主要な餌であるゴカイ類の減少が著しく、冬季のゴカイ類湿重量は1986-87年には平均で168g/m²であった(28)が、1995年では21g/m²に低下した。さらに近年では緑藻類であるアオサの堆積による環境悪化が生じ、外来種であるホンビノスガイが優占している。またイボウミナが消滅、ウミナナが希少化し、ホソウミナが最優占種となっている。このように、谷津干潟の底生動物群集は時間とともに干潟本来の生物多様性が衰退する傾向にある。この干潟は、野鳥渡来地としてまた湾奥の干潟生物の生息地として重要である。しかし立入が制限されているため市民が環境を体験する機会が少なく、干潟活用に関する具体案も現在のところ示されていない。

(4) 三番瀬ふなばし海浜公園干潟

三番瀬の東側にあった航路部を浚渫土砂で埋め戻すことで造られた人工の海浜で、三番瀬水域で最も広い干潟域を形成している。干潟面にはアサリやシオフキを初め、タマシキゴカイなどの多毛類も生息もみられる。潮干狩り場もあり、「ふなばし三番瀬学習館」による三番瀬の環境や生物を通じた環境学習の場としても機能している。小学生や幼児でも安全に干潟に接することができ、東京湾奥部の干潟生態系サービスを提供する場所として社会的関心も高い。

(5) 葛西臨海公園人工海浜

東京湾において、計画的に造成された典型的な人工干潟である。三枚洲と呼ばれる江戸川河口の浅瀬を覆砂して1970年代に造られた。「西なぎさ」と「東なぎさ」に分かれ、西なぎさは人工海浜とともに市民に開放されているが、東なぎさは野鳥を中心とした保護区として立ち入りが禁止されている。東なぎ

さでは高潮域にヨシ群落からなる河口湿地が広がり、景観的には東京湾の原風景的な要素を持っている。ヤマトシジミ、ソトオリ、トビハゼなどの汽水性の生物干潟生物が生息する。江戸川ならびに荒川放水路の河口部であり、増水時の塩分低下により環境としては不安定で、生物相や現存量の時間的変動が激しい。東なぎさは湾奥海岸としての本来の景観特性を有しており、干潟環境再生の事例となる。しかし立入制限が、景観観察や干潟環境観察の社会的活用を疎外している。

(6) 三番瀬周辺の生物相比較

2003年の

夏季に調査した猫実川河口沖を含む三番瀬周辺海域と2000年に調査した小櫃川河口干潟の底生生物群集の類似性について比較検討した(図-3)。

江戸川放水路干潟と新浜湖干潟の類似性が最も高く、次いで小櫃川河口湿地と三番瀬東浜干潟でもやや類似性が高かった。しかし、小櫃川

の前浜干潟と類似した生物群集は三番瀬周辺海域では認められず、三番瀬猫実川河口沖の生物群集はいずれの干潟域の群集との類似性もほとんどなかった。この三番瀬猫実川河口沖の生物群集はドロクダムシの一種、ホトトギスガイ、ミズヒキゴカイ類など浅海泥底に多い生物が優占し、干潟に依存的な生物種は少なかった。

このように現在の東京湾奥部の干潟はほとんどが人工的に造られたものである。このことは、人工的な干潟環境といえども、干潟生物群集の生活空間としての価値が高いことを示している。

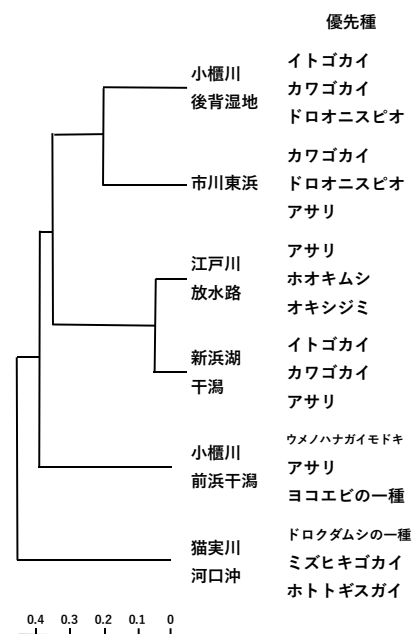


図-3 三番瀬猫実川河口沖と三番瀬周辺の干潟ならびに小櫃川河口干潟での底生動物(小型マクロベントス)群集組成の類似度 C_π(UPUGMA 法)と個体数優占種

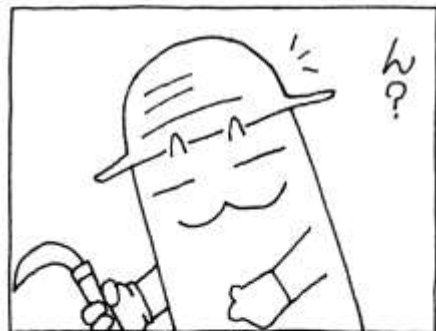
新浜の話 92 ～タヌキ・ハクビシン・アライグマ～

1980年代のなかばを過ぎたころから、市川市北部でタヌキが目につくようになりました。1990年代には野鳥病院に持ち込まれたタヌキが脱走したり、首輪付きの成獣が保護区に住みつき、やがて奇妙な食

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

痕(足がなくて胴体だけでまだ生きているカエル、前足だけ二つ並べてあったマスカラット)や足跡が見られるようになり、2004年、北池の土手で子供を2頭連れた親が撮影されました。

スロマン 作: 7月 8日 (56)



こんなに かわいいのに 害虫
とばかりに目の敵になくても...

タヌキは着々と増えました。丸浜川の餌場に子ダヌキ 4 頭が出て来たことも。最初の定着個体はごく少数だったのか、血族結婚の弊害か、脳障害で動作が不自由な子ダヌキが何頭も見られたこともあります。その後、2015 年ごろから疥癬にかかって体毛がはげた個体が目立つようになり、一時ほとんど消えてしまいました。それでも 2023 年ごろからふさふさとした健康そうなタヌキが復活してきて、2025 年には近くの住宅地でも当たり前のようにタヌキが見られています。

けもの扁に「里」と書く狸。昔からごく身近な生き物だったはず。それなのに、どうして犬や猫のようにペットにならなかったのか。私は犬も猫も狸も乳飲み子から育てたことがあります。犬や猫は、目もまだろくに開かないうちでも、じゃれ合っていて強く噛んでしまい、相手が悲鳴を上げたりすると、ぴたっとやめて、「ごめんね、ごめんね」と一生懸命なめてあやまります。ところが狸は逆にもっと強く噛むのです。「どうだ、参ったか、これでもか」

タヌキは自分がいちばん偉くて正しいのです。謝るなんてとんでもない。犬や猫は相手を認めて譲る社会性があるので、人間の存在を認めて共存できたのではないかとひそかに思っています。

このあたりでのハクビシンの最初の記録は、おそらく 1990 年に西船橋近くの図書館付近で、電線上を伝っていたという清水大悟さんの目撃例。長いこと野鳥病院に保護されていた下半身不随のハクビシン雌「おしん」は、2004 年に 1 歳ぐらいの若い個体として保護され、2025 年 3 月にスタッフの鈴木陽子さんのお宅で生涯を全うしました。享年 22 歳。見た目はとてもかわいいのですが、爪もあっさり突き通すほどの鋭い牙での攻撃がこわくて、最期まで安心してつきあうことはできませんでした。行徳での繁殖確認は、2005 年 11 月に新井で保護された雌の幼獣。この「おしん」ちゃんは少しも攻撃的でなく、おしんとくっついて眠ったり遊ぶ様子のかわいかったこと。害獣として駆除されることが心配で、申し訳ありませんが、翌年こっそり山梨県で放してもらいました。ハクビシンもタヌキ同様に定着し、一時は保護区周辺でもよく見かけましたが、最近はどうも聞きません。

このところ進出が著しいのはアライグマ。北米原産のアライグマは、体が大きく水辺の生きものや樹上の鳥にも被害を与えること、木登りばかりか建物へも上ること等から、特定外来生物に指定され、駆除対象になっています。2020 年ごろから足跡や無人カメラの映像が確認され、保護区での繁殖も間違いなさそうです。2023 年秋のこと、保護区に近い我が家で、1 階の私の部屋の猫出入口からアライグマが入ってきてびっくり仰天、という事件もありました。

もしかするともう 1 種、外房では普通の外来種、キョンが来たかも。今年の 8 月 12 日夕方、息子夫婦が帰宅途中に保護区入口近くで小型の鹿？を見かけています。今はまだこの 1 例だけですが。

矢切の渡し付近でキツネが定着、葛西でアナグマ目撃。こうした中型獣が都市近辺で増加・定着してきたのはどうしてか？野犬がいなくなったこと、犬の外飼いがほとんどなくなったことなどが考えられるとのことですが、やはりわからないなあ。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2025年11月号（第339号）の発送を11月 6日（木）10時から千葉市民活動支援センター（千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階）にておこなう予定です。お手伝いいただける方は小西 090-7941-7655）までご連絡ください。

..... あなたも入会しませんか

住所〒
ふりがな
氏名 _____ Tel _____

E-mail _____

会費の郵便振替口座は 00130-3-369499 です。

NPO法人ちば環境情報センターのニュースレターとイベント情報は、リサイクルペーパーを使用しています。

編集後記: 10 月に入っても気温 30℃越えの日が出るようになりました。しかし、見上げると空は高く一面のいわし雲。キンモクセイも香りだし、季節は確実に進んでいることに気づきます。春と秋を 1 か月ずつ減らし、夏を 5 か月にして「初夏・盛夏」とする「五季」という言葉も生まれました。今後、生きものたちはこの変化にどう対応していくのでしょうか。 mud-skipper

参加者 3 名 (大人 3 名)

【谷津田・季節のたより】 2025 年 9 月

<下大和田町> 報告 平沼勝男

- 9/7 ギンヤンマが、お米づくりをしなくなった田の上を縄張りにして飛んでいました。シオカラトンボも元気です。水路の葉の上にハグロトンボが止まり、翅を開いて閉じてを繰り返します。近くにはタカサブロウの花が咲いていました。夏の終わりを感じさせます。台地の上の開けた場所にアキノノゲシが咲き、アキノエノコログサがこうべを垂れていました。まだ暑いですが秋を感じさせてくれます。
- 9/14 チョウセンカマキリがハスの葉の上にとまっていた。最近見る機会が減っているアカガエルが水路に飛び込みました。田にトチカガミの花が咲いていました。カントウヨメナの花が可憐です。復田した田には緑米が一斉に出穂していました。今年はお餅つきがしたいと思いました。これから大事に育てます。近くの水路に設置したウシガエルの罠に大きめのギンズナと、小型のギンズナが入っていました。逃がしてあげました。
- 9/21 水面にオモダカの花が咲いていました。畦を歩くとキタテハが足もとで翅を広げていました。美しい赤とんぼが目の前に止まりました。マユタテアカネのオスです。この時期一番美しい赤に発色します。すっかり元気を失った、以前はカブトムシが集まったクヌギの木に白い大きな美しいキノコが付いていました。あとで、キノオオフクロタケというとても珍しいキノコでした。

<小 山 町>

(小学校田んぼ) 報告 赤：赤シャツ親父、た：たんぼぼ

- 9/1 おおほたるコシヒカリ稲刈り開始(た) 9/6 子ギツネ?の様な姿、路を横切り山へ消える(た・赤) 9/10 ムラサキノマイの花咲く(た) 9/21 小山彼岸花咲く(た) 9/27 イボクサの花、可憐に咲く(た)。無数の黒蟻の羽アリ、飛行しきながらアリ柱を成す(赤)

(小山全般) 報告 碇：碇タ子、波：波多野めぐみ、高：高山

- 9/1 イソヒヨドリがメスが電線に止まっていた。小山で初認、キンミズヒキが開花(高) 9/2 スギの木のてっぺんに止まるサシバをカラスがモビング、ヤマドリが刈田で餌探し、ヤマガラがエゴノキをしきりに訪れて実を採る(高) 9/8 オスメス連結したギンヤンマが刈田で産卵(高) 9/11 キジの家族が刈田で餌探し、オオアオイトトンボの姿が目出すようになる(高) 9/15 ヒガンバナの花芽が突然現れる→9/17に開花(高) 9/21 刈ったイネにハスモンヨトウの幼虫をよく見かける、鮮やかな緑色のさなぎがイネについていた(碇) 刈田でダイサギが餌探りに熱中していて近づいても逃げない(波) 久しぶりにセグロセキレイのペアを見る、ノシメトンボが連結して田んぼで産卵(高) 9/28 刈田にアカネの仲間(ノシメトンボ、ナツアカネなど)のトンボの姿が増える、刈田で地味なエクリプス羽のコガモの小群が羽根を休める、ミゾソバが多数開花(高)

【イベントのお知らせ】 主 催：NPO法人 ちば環境情報センター

<下大和田谷津田> 連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655, E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com

・森と水辺の手入れ

日 時：2025 年 10 月 19 日(日) 9 時 45 分～12 時 雨天中止

内 容：昨年からの米づくりのできなかったマイ田んぼ復活のための整備と復田した田んぼの手入れを行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・第 311 回下大和田 YPP「古代米の稲刈り」

日 時：2025 年 10 月 25 日(土) 9 時 45 分～12 時

内 容：5 月 17 日に田うえをした緑米と赤米を収穫します。久々の YPP です。

持ち物：長靴、長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物など 参加費：無料

・森の手入れ

日 時：2025 年 10 月 26 日(日) 9 時 45 分～12 時 雨天中止

内 容：森の木の伐採や畑の整備を行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・第 310 回 観察会とゴミ拾い

日 時：2025 年 11 月 2 日(日) 9 時 45 分～12 時 雨天決行

内 容：秋本番。木の実・葉の色付きを観察しながら秋たけなわの森と谷津を巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100 円

<小山町谷津田>

睡蓮田んぼ「古代米の脱穀作業」

日 時：2025 年 10 月 5 日(日) 10 時 00 分～ ☆小雨決行

場 所：りんどう広場

※ 学校田んぼと睡蓮田んぼに関しては赤シャツ親父 (tomizo_i@nifty.com)、その他のお問い合わせは高山 (ceic.ypp.oyama@gmail.com) までお気軽にメールでご連絡下さい。

